

Personality 検討課題としての知覚判断
— Field Dependence 概念と測度の検討 —

神永 典郎*・吉田 昭久**

（1990年9月14日受理）

Perception Tests as a Means of Studying Personality:
An Investigation of the Concept of Field Dependence and Its Measurement

Norio KAMINAGA and Teruhisa YOSHIDA

（Received September 14, 1990）

はじめに

知覚（perception）は、人間の活動の継起点として、人間行動過程の最初の入り口にあたる。われわれは知覚によって自己にとっての情報を取り入れ、その情報をもとに判断を行い、自己の活動のための準備をする。知覚による判断によって取り入れられた情報が、社会的判断など各種の意志決定（decision）の基礎となっているのである。行動を行為者の主体内部の条件と環境との相互作用として理解するとき、その外的条件は、単に物理的な要因を取り上げるだけではなく、行為者によっていかに受けとめられたかという認知（cognition）が問題となる。日常の社会的行動の場面などでは行為者なりの受けとめと判断が行われるが、単なる個人差や測定の誤差としてではなく、知覚判断とこれらの判断過程にある一定の機制や特性が明らかになれば、それは、状況を越えた個人の行動傾向の一貫性を研究してきた Personality 研究の検討課題として価値あるものとなる。

知覚研究において行為者の主体的条件と認知される環境との関係を扱ったのが、New Look Psychology である。加藤（義）は、知覚を決定する要因を、主に外界の刺激に限定した Gestalt Psychology に対して生体の内部条件も知覚場面で考慮に入れねばならない要因であり、特にこの領域を研究したのが Social perception または Dynamic perception であるとして、所詮 New Look 心理学と呼ばれる心理学領域に関する展望を行っている¹⁾。New Look Psychology は、知覚に影響する人格・社会的要因を強調し、知覚研究の新しい分野を開拓して価値や欲望、情動などによる知覚的防衛の問題の検討を課題とした。しかしこの種の研究は、越智が指摘するように²⁾、①元来便宜的に考えられた二分法的思考にとらわれすぎたこと、②臨床的人格論の防衛の概念とズレがあるこ

* 茨城大学教育学部附属小学校。

** 茨城大学教育学部教育臨床心理学研究室。

と、そして③この種の研究のほとんどがタキストスコープを通して与えられる外的対象刺激の認知を扱っていたこと等の理由から、急激に衰退する。加藤（義）は、この New Look Psychology の研究動向に対する反省から、Frankel-Brunswik の指摘した知覚研究の二つの方向、すなわち perception centered approach と personality centered approach のうち、もう一度個人差まで立ち戻って知覚と Personal な要因との関係を検討すべきだと主張した³⁾。このような流れの中で、力動的精神分析学からの影響を受けた認知研究がなされるようになった。

H. Hartoman らによる自我の適応の問題へ関心に向けた自我心理学的研究がそれである。彼らは、自我とエスの葛藤からほぼ自由（conflict free）な自我領域である認知、判断、記憶、思考、言語などの領域に着目し、その働きの重要性を主張している⁴⁾。New Look 系の知覚研究が、知覚と欲求の関係の追求において、ある欲求を誰の知覚にも一定の影響を与えるものとして取り扱ってきたのに対して、自我心理学の系譜の知覚研究では、ある欲求への対処は個人の独自な取り組みでなされており、それに関わる刺激価も異なることから、当然のこととして知覚における個人差の重視を主張した⁵⁾。

本研究では、このような個人の認知、知的活動を通して広く見出せる個人を特徴づける一貫した行動傾向、すなわち、心理ダイナミズムを基底因とする広義の Personality に示される対処の型（coping styles）として、H. A. Witkin らが知覚判断における個人差から見出した“場依存性—場独立性（field-dependence—field-independence）”次元⁶⁾に着目し、その概念と測度の検討を行う。

また、この概念の視座から知覚に限らない自我機能一般を捉えようとし、個人特有の機能様式として認知スタイル（cognitive styles）と名付け、取り扱われてきたことへの問題点にも触れたい。

なお、本論文構成の概略を示すと、以下の通りである。

I 認知機能に反映される Personality 検討概念としての Field Dependence

I-1 Personality 検討概念としての Field Dependence

I-2 Field Dependence 概念の変遷と測度

II EFTとEFTの測定

II-1 EFT調査票の作成

II-2 調査方法及び調査協力者

II-3 調査結果及びEFT測度の検討

III RFTとRFTの測定

III-1 本研究で用いたRFT

III-2 調査方法及び調査協力者

III-3 調査結果及びRFT測度の検討

IV Field Dependence の測度としてのRFTとEFT

IV-1 Field Dependence の測度としてのRFTとEFTの検討

IV-2 Field Dependence 概念とその関連諸課題検討の視座

I 認知機能に反映される Personality 検討概念としての Field Dependence

I-1 Personality 検討概念としての Field Dependence

H. A. Witkin らは、いくつかの知覚実験において有意に意味ある個人差を見出し、この点に関して、“場依存性—場独立性 (Field Dependence—Field Independence)” という知覚に反映される次元に絞って追求した^{7),8)}。Witkinらは、垂直・水平状態における視覚的要因や身体的要因について一連の研究を行う中で、個体の垂直判断には、かなりの個人差がみられることを報告し、その個人差を分析したところ、各被験者は、異なる場面でもかなり一貫した傾向を持ち、視覚的場によるかあるいは身体位置によるかの知覚様式で判断を行うことを明らかにした^{9),10),11),12)}。この知覚様式の差は、RFT (Rod and Frame Test) の垂直知覚における誤差に反映すると考え、その判断誤差が大きい者を“Field Dependence (FD: 場依存型)”，判断誤差の小さい者を“Field Independence (FI: 場独立型)” と操作的に定義した。“場依存性—場独立性 (以下、FD—FI と略す)” 次元の測度となった RFT は、暗室内に呈示された frame とその中央にある rod を、frame の傾斜と自己の椅子の傾斜にかかわりなく、被験者が実験室の床面に対して垂直に調整するものである。そして、知覚判断で捉えた垂直と、真の垂直との間の判断誤差を求め測度とする。本研究では、心理ダイナミズムとしての自我とエスの葛藤から比較的自由的な自我機能として、知覚判断で個人を特徴づける一貫した行動傾向として見出された“場依存性—場独立性 (FD—FI)” 次元 (以下、FD 次元と略す) を、認知機能を反映した Personality 検討概念という視座から捉え検討する。

I-2 Field Dependence 概念の変遷と測度

H. A. Witkin らは、空間定位における個人差を解明しようとする研究の中で、RFT の他にも、TRTC (Tilting Room—Tilting Chair test) と RRT (Rotating Room Test) を検討している。TRTC は、傾いた部屋の中で、傾いた椅子に腰掛ける自己の身体を垂直に維持する BAT (Body Adjustment Test) と、自己の身体の傾きを考慮して部屋を垂直に調整する RAT (Room Adjustment Test) とから成っている。この二つのテストとも RFT 同様、知覚判断した垂直と真の垂直との判断誤差を測度とする。RRT は、回転する円盤の上に設けられた傾いた部屋の中の椅子に座って、遠心力と重力を手がかりとして部屋または自己の身体を垂直に調整するものである。

TRTC を回転盤の上に載せて行うという条件で、これも知覚判断する垂直と真の垂直との判断誤差に関して二つの測度が得られる。

RFT, TRTC (BAT, RAT), RRT (BAT, RAT) の知覚判断の課題解決過程を検討すると、各測度は、自己の知覚する身体感覚と垂直定位のための周囲の場からの視覚情報との間の拮抗を判断する事態だと考えられる。Witkin らはこれらの測度の検討を通して、RFT と、TRTC および RRT の BAT の三つの測度は、FD 次元の測度として適切であるが RAT 条件で測定される二つの測度は不適切であるとして除外している。RFT と BAT 条件は、周囲の場に含まれる item から item を抽出して知覚する判断課題であるのに対して、RAT 条件では調整課題が周囲の場としての部屋であることから、判断課題としては異質なものとされた。そして、RFT

とBAT条件に共通する課題解決過程を‘itemを周囲の場から抜き出すこと’とし、このときの判断の誤りの多さがFD次元になると考え、新たにEFT（Embedded Figures Test）をFD次元の測度として考案することになる。

この段階で問題として残される点は、RFTとBAT条件の課題解決過程に共通する点を‘itemを周囲の場から抜き出すこと’と総括してしまい、RFTやBAT条件に特徴的な‘自己の身体感覚に照らし合わせて垂直の知覚判断を下す’という課題解決の要素を捨象してしまったことにあると考える。

続くEFTは、多くの線や図形部分によって図形のまとまりや線の連続性を見つけ出し難くした複雑図形の中から、単純図形をいかに早く正確に見つけ出し判断して行くかという課題である。この課題は、先に定義された‘itemを周囲の場から抜き出すこと’という点からすれば、RFTやBAT条件と同一の測度であり、ある背景（場、文脈）とそこから分節化すべき対象との関係という構造をもっており、それによってその背景に影響される（場依存性）か、影響されない（場独立性）かという知覚のスタイルが見出されると考えている。しかし、EFTの課題解決過程では自己の内部感覚を課題解決に用いており、正確さと早さがその測度の内容に入り込んでいるという重要な視点を、Witkinらはあまり考慮せずにこの測度を導入したことには問題があると考えられる。Witkinらは、RFT、BAT条件、EFTなどの測度をField Dependenceという一まとまりの概念として性急にまとめすぎてしまったと言えるであろう。このことは、後にFD次元をより広い概念として“大まかな一分節化した（Global—Articulated）”次元へと改めて行った¹³⁾ことにもうかがえる。

越智に従えば、H. A. WitkinらのField Dependence概念は次のような広がりを見せたという。この一つの認知的な発見を手がかりに、彼らは人格のより大きい基本的な布置（constellation）へと関心を移してゆくが、その中心になるものが、分化（differentiation）の概念である。これはK. LewinやH. Wernerの発達理論が基礎になっている。彼らは人間の発達を、自己および世界についての経験の成長という面から検討し、分化への進歩が、経験の分節化の増加、すなわち、分析と構造化（analysis and structuring）で表現されると仮定する。ここで“大まかな一分節化した（Global—Articulated）”次元が設定され、二つの認知スタイルすなわち分節化的認知スタイルと大まかな認知スタイルが想定されることになる。これは、先の“場依存性—場独立性”の次元が、主として外的な対象の知覚にかかわるものであったのに対して、自己の感覚、身体イメージといった、より人格の中核に位置するものの認知を含めているものである。Witkinは、全体としての心理システムの分化を想定し、分節化した身体概念をその分化の指標であると考えた。ここに認知スタイルの一貫性（consistency）が仮定されることになる¹⁴⁾。

しかし、依然として認知スタイルの一貫性の問題が残されることになる。それは、Witkinらが概念の理論的検討を先行させてしまい、概念の先行課題であるはずの測度についての検討を厳密には行わなかったために、場依存性の共通の測度とされたはずのRFT、BAT条件、EFT等それぞれの変数と、それと関連付けられた別の心理学的変数との間で、異なった関連を示す結果を得たり、全く逆の関連を示す結果を得たりするといった研究結果が報告されたことである。その結果再び、Field Dependenceとは何か、それはPersonality検討概念となり得る認知の型なのか、それとも認知能力なのか、そもそもRFTとEFTは何を測定しているのか等々の議論に立ち戻って

しまうことになる。

そこで本研究では、筆者らが別の研究目的で行ったFD次元の測度として用いたEFTとRFTの測定結果の資料をもとに、FD概念とその測度に関する検討を試みた。

II EFTとEFTの測定

II-1 EFT調査票の作成

神永・吉田は、FD次元の測度の一つとされるEFTの測定を実施しているが、測定に用いたのは、加藤が数度の検討を加え改訂した新EFT¹⁵⁾を筆者らがさらに改良した、集団式EFT（略称GEFT）である^{16),17),18)}（Appendix I-i, ii, II-i~ivを参照）。

筆者らが作成したEFTと加藤のEFTとの相違点は次の通りである。

①刺激図形は加藤版と同一であるが、答えの記入欄を図形右下に設けたこと。②検査のくやり方>の説明文を検査用紙に入れたこと。③<練習例>を用意したこと。以上の三つの点である。①は記入、採点の位置を明確にするために、②・③は、集団で実施する際に、検査の方法についての理解を徹底させる必要があり、方法不徹底のための影響がでないように配慮したものである。

検査用紙は『図形認知の方略に関する調査票』と題され、本報告では触れていない日常行動場面に表出する人間の攻撃性を対人行動イメージから測定する「対人行動イメージ調査票」^{19),20)}と組み合わせ、「図形認知とパーソナリティの関連性に関する調査」と題したもの（Appendix I-i）と、同じく本報告では触れていない現代青年の日常生活意識における自己疎外の構造を検討する「大学生の日常意識に関する調査票」^{21),22)}および「自我同一性地位判定尺度」²³⁾と組み合わせ、「大学生の図形認知と日常意識に関する調査」と題したもの（Appendix I-ii）とを、ほぼ同様の形式で作成し、使用している。

II-2 調査方法及び調査協力者

調査の手続きと実施方法は、①検査実施者の協力者への挨拶、②教示用テープによる教示、③練習例の実施と回答方法の確認、④本検査の実施の順である。

EFTの回答方法は、検査用紙の左側の枠の中にある図形と「同じ形・同じ大きさ・同じ方向」の図形が右の四つの図形の中のそれぞれに入っていれば、各図形右下の欄に○印、入っていなければ×印を記入していく。本検査は、基本図形が34、判断する図形が136で、10分間の時間制限法で実施する。個別に検査用紙を含む調査票を配布し、実施上の注意を与え、検査実施者の合図に従って行う。一連の手続きは、教示用テープによって各回とも同一条件となるよう与えられた。

本研究では、三度のEFT検査結果を検討対象とする。各検査の実施時期は、検査Ⅰが1982年11月中旬、検査Ⅱが1984年7月上旬、検査Ⅲが1984年10月～11月上旬である。調査協力者は、検査Ⅰでは、茨城県内の茨城大、茨城キリスト教大、東京都内の立教大、法政大、上智大の5大学8学部の2～4年生、男性301名、女性280、計581名、検査Ⅱでは、千葉大と茨城大の2大学の教育学部の2～4年生、男性120名、女性178名、計298名、検査Ⅲでは、茨城大、千葉大、東京都内の東洋大の3大学9学部の2～4年生、男性332名、女性461名、計739名である。

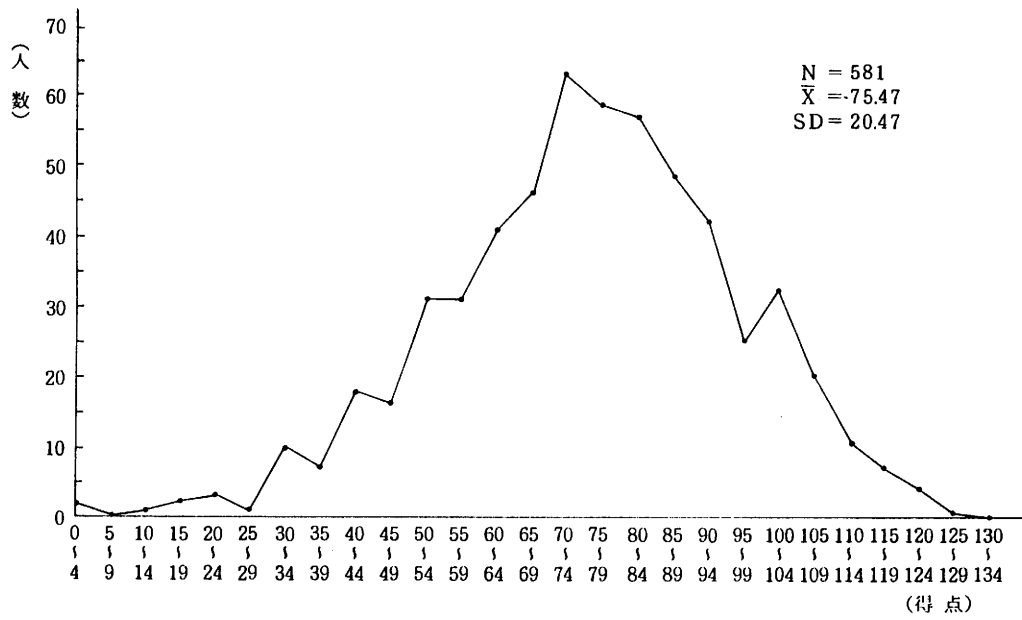


図1 検査ⅠのEFTの得点分布

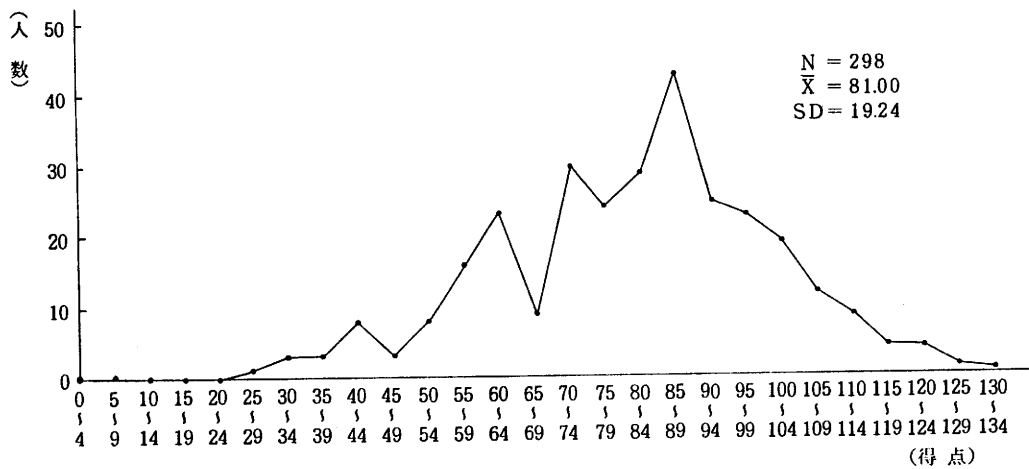


図2 検査ⅡのEFTの得点分布

II-3 調査結果及びEFT測度の検討

EFTの得点化は、時間制限内に回答したもののみを採点し、個人ごとに、EFT得点＝(正答数)－(誤答数)で算出した。このEFT得点に基づき、高得点者をFI、低得点者をFDとする。FD-FIの分割の基準としては、便宜的にEFT得点分布上で上下各50%または上下各25%を用いている。

検査I, II, IIIで測定された各個人のEFT得点の分布を、それぞれ図1, 2, 3に示す。三度

表1 各検査の集団式EFT (GEFT) の男女別および全体の平均得点, 標準偏差, t値

性別	検査 I				検査 II				検査 III			
	N	X	SD	t	N	X	SD	t	N	X	SD	t
男性	301	76.01	21.20	0.98 (n.s.)	120	82.15	20.34	0.85 (n.s.)	332	79.60	22.58	1.11 (n.s.)
女性	280	74.89	19.68		178	80.22	18.45		461	79.77	19.65	
全体	581	75.47	20.47		298	81.00	19.24		793	80.00	20.92	

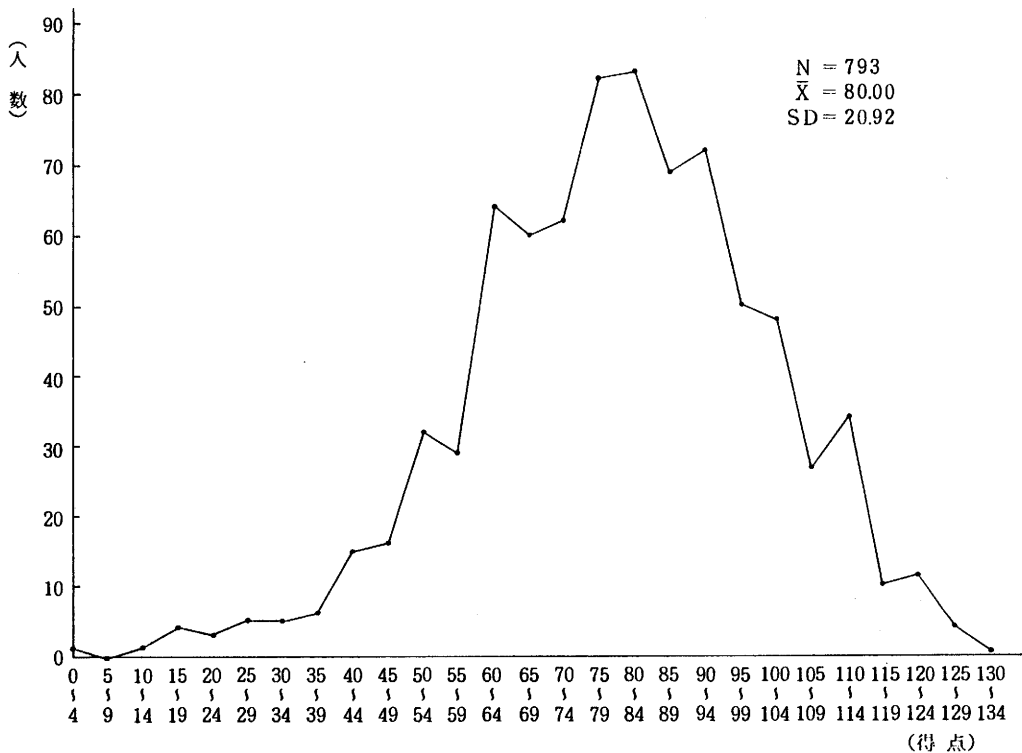


図3 検査IIIのEFTの得点分布

にわたる検査のいずれにおいても、得点の分布型は正規性が確かめられた。三回の検査それぞれの男女別（M, F）および全体合計（T）の平均点（ \bar{X} ）と標準偏差（SD）および男女差のt値を表1に示す。

各回のEFT得点とも男性において標準偏差値が幾分大きく示されているが、各々のF検定の結果、分布の同質性が確かめられたので、t検定によって男女の平均の差を確かめたところ、表1に示すように、有意な差は見出されなかった。

本研究でのEFTは、加藤版のEFTと同一の図版を同数、同配列で使用し実施しているが、加藤の結果が、平均得点33.27、標準偏差9.53であるのに対して²⁴⁾、本研究では平均得点は75.47～81.00、標準偏差は19.24～20.92と、テスト実施間に大きな差を示す結果となっている。この要因として考えられることは、本研究で用いたEFTの場合、①回答方法の理解を徹底させたことと、②調査の目的を明示し、③別の質問紙調査との組み合わせにより調査協力者が調査の趣旨を理解していたこと、従って、④検査を受けようとする構えをつくることのできていたこと、といった点が考えられよう。

Ⅲ RFTとRFTの測定

Ⅲ-1 本研究で用いたRFT

本研究では、検査ⅣおよびⅤにおいてFD-FI次元の本来の測度であったRFTを用いた測定を行っている。測定に使用した器具は、加藤により開発されたK-type RFTである。加藤は、Witkin型のRFTが大がかりな装置を必要とするため、より簡便でポータブルなRFTを作製している^{25), 26)}。K-type RFTとWitkin型RFTとの相関は、 $r=0.767$ と報告されており²⁷⁾、かなり高い相関関係を有している。そこで本研究におけるK-type RFTの測定結果を、FD研究上のWitkin型RFTの測定結果に関する議論と関係づけて検討しても妥当といえるだろう。

K-type RFT（竹井機器工業K.K.製）は、本体 $350 \times 260 \times 600$ mmの暗箱が、伸縮を自由に設定できる三脚上に装着され、三脚上部のハンドル操作により本体暗箱の左右の傾き

を変化させることができるようになっている。暗箱内部の構造は、回転する正方形のframeと、その中心の位置に置かれた回転するrodによって構成され、暗箱側面のハンドル操作によりrodとframeの各々を独立に回転させ、分度器によって計測できるようになっている。また暗箱内部のrodとframeの呈示部と被検査者の覗き窓部との間に枠消去のためのつい立てを装着することによ

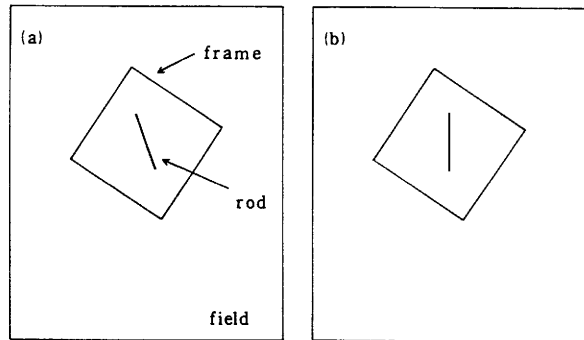


図4 RFTの原理

(a)は垂直判断誤差量が大のとき、すなわちFD。

(b)は垂直判断誤差量が小のとき、すなわちFI。

表2 検査ⅣのRFTの測定条件

rod の回転方向	frame の有無	
	有	無
左	a	c
右	b	d

表3 検査ⅤのRFTの測定条件

rod の回転方向	frame の傾き	
	左30°	右30°
左	a	c
右	b	d

って、枠無し条件を測定できるように制作されている。

本研究の検査Ⅳ、ⅤにおけるRFTの測定条件をそれぞれ表2、表3に示す。

検査Ⅳの測定条件は、Witkin²⁸⁾、Kato²⁹⁾の従来の研究と同様、頭を30°傾けておき、frame有の場合は暗箱側面に対してframeを左30°に固定した上で、frame有無の2条件とrodの回転方向左右の2条件を掛け合わせたa～dの4条件で測定を行った(表2)。検査Ⅴの測定条件は、頭を30°傾けておき、frame有で暗箱側面に対してframeの左右30°に設定する2条件とrodの回転方向の左右の2条件を掛け合わせたa～dの4条件で測定を行った(表3)。検査Ⅳと検査Ⅴとでは、検査Ⅳはframeの有無条件があること、検査Ⅴはframeの左右の傾き条件があることで異なっている。測定にあたっては、両実験とも実験者調整法により、a～dの各4条件に関して繰り返しを4回とし、計16回をカードによって無作為化した上で行っている。

Ⅲ-2 調査方法及び調査協力者

RFTの測定は、検査Ⅰ、Ⅱ実施時に後日の第二次調査への協力を依頼し検査協力者を募集し実施した。検査場所は、茨城大学教育学部A棟5階、脳波室内遮蔽室であり、室内は、照度、気温等が一定に保たれている。教示は、教示テープを用いることによって同一条件を確保した。教示の内容は次の通りである。

「これからやっていただくことの説明をします。目の前の傾いた箱を見てください。すぐ目の前にあるのが顎載せ台です。そこに顎を載せてみてください。背中まっすぐに伸ばし、頭だけが傾くようにしてください。椅子の高さはどうですか。・・・(椅子の高さを調節する)・・・台に顎をしっかりと載せて、前を見てください。青白く光る四角い枠と、その中に棒が見えますね。四角い枠の方は固定されていますが、棒の方は左右に回転します。一度回してみましょう。これから私が、中の棒を傾いた状態からゆっくりと回転させますから、あなたは、自分で床に垂直になったと見えたら『はい』と大きな声で教えてください。箱や枠に対して垂直というのではなく、床に対して垂直に見えたとき、すぐに答えてください。顎をはずしてみてください。箱の左手の方を見てください。丸いつまみがあります。このつまみを回すと、枠と棒は見えなくなるようになっています。やってみてください。・・・(つまみを回して覗き窓の扉を開閉してみる)・・・あなたは、『はい』と答えたらすぐにつまみを回して、枠と棒が見えなくなるようにしてください。そして私が『はい、次へ進みます。』と言ったら、つまみを再び回して、枠と棒が見えるようにしてください。頭はなるべく離さないようにしてほしいのですが、もし首が疲れたら、待っている間に台から頭を離して、疲れをとっても結構です。棒と床が垂直に見えたら、すぐに『はい』と答えるように努力

して下さい。」

調査協力者は、検査Ⅳ、Ⅴの両検査とも次のような手順で選定した。

①EFT検査の結果から検査の予備対象者として、FD、FIの各グループをわける。②グループ分けの基準は、EFT得点分布の上位下位それぞれ25%に含まれる者のうち、上位下位の1%に入る者を除いた者である。その結果、③検査ⅣではFD 146名、FI 147名、計 293名を、検査ⅤではFD49名、FI 49名、計98名を予備対象者として登録した。その上で④第二次調査に協力の得られた者を対象にRFTの測定をおこなった。⑤最終的には、検査Ⅳでは男性28名、女性45名、計73名、検査Ⅴでは男性21名、女性25名、計46名であった。

Ⅲ-3 調査結果及びRFT測度の検討

検査Ⅳ、検査Ⅴによって測定されたRFT結果を表4、表5に示す。

検査Ⅳでは、頭を左30°に傾けた状態を基本とし、左30°に固定したframe有りでrodを右から回転させる条件bのとき垂直判断誤差が最大となる。ついでframe有りでrod回転左の条件a、frame無しでrod回転右の条件d、最後にframe無しでrod回転左の条件cの順となった。この結果から各条件間の差を検定したところ、 $b > a$ という結果を得た。また、男女差は見られなかった。

検査Ⅴでは、頭を左30°に傾けた状態を基本とし、frame左30°でrodを右から回転させる条件bのとき垂直判断誤差が最大となる。ついでframe左30°でrod回転左の条件a、frame右30°でrod回転右の条件d、最後にframe右30°でrod回転左の条件cの順となった。この結果から各条件間の差を検定したところ、 $b > a$ という結果を得た。また、男女差は見られなかった。

検査Ⅳ、Ⅴを通して、頭を左30°にし、rodを右から回転させる条件のとき、最も垂直誤差が大きくなることが明らかとなった。また両検査とも、有意な男女差は見られなかった。

以上の結果から、まずframeの有無の効果について検討してみると、frame有りの場合の垂直判断誤差が多い($F = 9.260^{**}$, $df = 145$, $^{**} : p < 0.01$)。この結果は、加藤³⁰⁾、宮本・吉田³¹⁾、坂永³²⁾と一致する。frameの左右については、平均誤差量から見て、右傾斜より左傾斜の場合に垂

表4 検査ⅣのRFTの各条件下の平均誤差量

条 件	a	b	c	d
X	6.58	5.17	4.98	4.22
S D	3.24	3.11	2.98	2.60
t	2.664 ^{**}			

注) RFTの測定単位は角度 $df = 62$ $^{**} : p < 0.01$

表5 検査ⅤのRFTの各条件下の平均誤差量

条 件	a	b	c	d
X	4.92	6.72	4.11	4.16
S D	2.60	3.00	2.86	3.19
t	2.679 ^{**}			

注) RFTの測定単位は角度 $df = 70$ $^{**} : p < 0.01$

直判断誤差量が多い。これは、暗箱自体が左 30° に傾いていることとの相乗効果と考えられるが、この点に関しては、加藤³³⁾においては差を見出していない。次に、rodの回転方向について垂直判断誤差量の平均値から検討すると、左側から回転する条件よりも右側から回転する条件の方が誤差量が多い。この結果は、宮本・吉田³⁴⁾の結果と一致したものとなっている。

検査終了後、調査協力者から内省報告をもらっているが、その内容の多くが、①暗箱内のrodとframeとの関係について、②自己の身体感覚とrodとの関係について言及したものであった。このことはRFTが、身体感覚と視覚情報との拮抗した知覚判断課題を内容として含んでいるという、瀧上・嶋田³⁵⁾、鋤柄³⁶⁾の指摘を支持するものである。

RFT検査での課題実施事態は、frameを周囲からの単なる客観的状況要因と考えて設定しているが、frameの受けとめ方という点で既に被検査者各個人間に差のあることがB. J. Fineら³⁷⁾によって指摘されており、RFTを、単にrodをframeの影響から独立して調節する知覚判断課題としては単純化できない、ということも考慮に入れなければならないであろう。

IV Field Dependence の測度としてのRFTとEFT

IV-1 Field Dependence の測度としてのRFTとEFTの検討

本研究でRFTの測定を行った検査IV、Vの調査協力者は、前述のように検査I、IIのEFT測定の協力者であり、その結果に基づいたEFT得点分布における上位下位それぞれ25%内のFDグループまたはFIグループに属するとして、第二次検査の予備対象者に選定された者であって、しかも実験室での検査協力が得られた者である。従って、検査IのEFTと検査IVのRFT、検査IIのEFTと検査VのRFTをそれぞれ同一の検査協力者に実施している。その結果、検査IにおけるEFTと検査IVのRFTとの関連では、EFT得点分布における上位下位それぞれ25%以内にいる予備対象者の内の73名にRFTを実施しており、この73名について、EFT得点とRFT得点に関して、FD方向に得点を変換してスピアマンの順位相関係数を求めたところ、 $r = 0.405^{**}$ ($df=72$, $** : p < 0.01$) という結果を得た。同様に、検査IIのEFTと検査VのRFTとの関連では、EFT得点分布における上位下位それぞれ16.4% (全体の約6分の1)の予備対象者の内の49名について、スピアマンの順位相関係数を求めたところ、 $r = 0.055$ ($df=48$, n. s.) という結果を得た。

この二つの結果を検討してみると、検査IのEFTと検査IVのRFTとの間で有意に相関があったにせよ、EFT得点分布における上位下位それぞれ25%の範囲に入るFDあるいはFIとして、きわめてはっきりと差のある典型例をRFT測定の対象にしたことを考えると、必ずしも高い相関であるとは言えない。EFT得点の上ではFDである者が、RFT得点では垂直判断誤差量の少ないFIの者である場合のあることを示していることになる。さらには、検査IIのEFTと検査VのRFTとの間で、相関関係が明確にされなかったことと考え合わせると、Personality 研究の検討課題としてRFTとEFTに共通して測定し得る部分があるかどうかについても、疑問を提せざるを得なくなってくる。

IV-2 Field Dependence 概念とその関連諸課題検討の視座

Witkin らの初期の研究において R F T の測度は、直接的な視覚刺激に基づく垂直定位反応と、自己が受容した視覚刺激の手がかりとの対比が判断課題として問題とされていた^{38), 39), 40), 41)}。この点からも、R F T は自己の身体感覚と周囲の場からの垂直定位情報が拮抗する知覚判断の課題事態だとする瀧上⁴²⁾の指摘はうなずけるところである。鋤柄⁴³⁾、Witkin の Field Dependence の概念から、E F T と R F T の両測度に共通してある情報処理過程は、‘ある文脈の中に埋もれている目標対象を抽出する能力’と仮定し、‘抽出する’という過程が R F T においてどのようなのかを知覚実験を通して検討している。その結果、R F T と E F T の両者は、視覚情報の処理という点では共通する点が認められるかもしれないが、R F T の個人差には視覚情報と内部感覚の情報との相互作用をどう処理するかの過程があると指摘している。

本研究における内省報告からも、調査協力者たちの判断の手がかりには、frame と rod 等の視覚的な情報との関係と、rod と自己の身体との関係という内部的な感覚との二つがあることが示されている。このことと、検査 I と検査 IV、検査 II と検査 V での同一調査協力者の E F T と R F T 得点間にそれほど高い相関がみられなかったことを考え合わせると、Witkin らが主張するように、R F T をすべてのテストに共通する情報処理過程を抽出できる測度を含むものとして扱うのではなく、鋤柄が指摘するように、テスト独自の処理過程を考えていく方が妥当であるように思われる。

一方、E F T の課題解決過程は、埋もれた図形の中から単純な図形を抽出するという視覚優位な情報処理過程のみが存在し、自己の身体感覚の情報を反映させることはほとんどない。むしろ図形認知の気づきの良さ、すなわち、知能や創造性との関連性が、加藤（義）⁴⁴⁾、江川^{45), 46)}、加藤（厚）・加藤（隆）⁴⁷⁾、Witkin ら⁴⁸⁾等によって指摘される結果となっている。この点から考えみても、R F T と共通の知覚判断過程を考えて測度とするよりも、E F T の課題解決過程に即した諸側面を捉えた F D 概念として検討していくことの方が望ましいと言えよう。

本研究の E F T、R F T の両測度において性差は見出されなかったが、従来の研究では、Field Dependence の特徴として、その測度に性差のあることが、G. M. Vaught⁴⁹⁾、H. B. Witkin ら⁵⁰⁾、N. Kato⁵¹⁾、瀧上⁵²⁾等によって指摘されている。ここで問題となるのは、先に述べた測度の問題である。瀧上⁵³⁾が場依存性の性差の問題に関して論究する内に、結局のところ F D 概念の問題へとその論点を移さざるを得なくなってしまったように、F D 次元の性差の問題は、その検討に用いた測度がどのような要因を反映しているのかということと密接に関係する。測度を課題解決過程から検討するならば、F D 次元において性差があるとする報告も、F D 概念にかかわらず検討の余地があると考えられる。神永・吉田⁵⁴⁾は E F T を測度とした F D 次元で異なる者について、集団場面での課題解決行動を検討し、F D に属する者の行動に性差を見出している。

F D 次元で性差を検討する際の方法としては、F D 次元の各々の測度について、その測度が反映する課題解決過程を明確に把握すると同時に、その測度によって同一群に分類される者のいかなる行動様式に男女間の性差が介在するかを検討し、さらに、それは測度の持つ課題解決過程を反映するものなのか、他の要因の影響を反映するものなのかといった点を検討していくことが必要であろう。こうした点が明らかになることによって、生理・生物学的な性差と、社会的な諸要因に規定された性差とに関して検討して行く際の重要な視座を得ることができる。また、F D 次元を取り上げ

て検討する際には、Witkin らによって一般化されたFD概念で結果を解釈するだけではなく、研究の際に取り上げたFDの測定する質的な知覚判断過程と対応させて行くことが必要であろう。

おわりに

本研究は、神永の1982年度茨城大学教育学部卒業研究および1984年度千葉大学大学院教育学研究科に提出した修士論文で得た資料のうち、「Field Dependenceの測度としてのRFTとEFT」に関する調査結果を再検討したものである。神永が作成した草稿を吉田が最終的に検討した。

なお、本研究で使用した集団式EFTの作成にあたり、東京都立大学人文学部の加藤義明教授には集団式EFT図形を御提供いただくとともに、貴重な御指摘をいただいた。また研究の実施にあたって調査に協力した学生諸氏、教育心理学研究室でゼミナールを構成した学生諸氏の多大な貢献のあったことを付記して、深甚の謝意を表したいと思う。

注

- 1) 加藤義明「New Look 心理学の展望」【心理学研究】36 (1965), pp. 140-154.
- 2) 越智浩二郎「人格と認知」【認知心理学講座 第1巻 認知と心理学】(東京大学出版会, 1984), p. 202.
- 3) 加藤, 前掲論文。
- 4) 越智, 前掲書, p. 203.
- 5) 同書, p. 203.
- 6) H. A. Witkin, H. B. Lewis, M. Hertzman, K. Machorver, P. B. Meissner, & S. Wapner, *Personality Through Perception* (New York: Harper, 1954) を参照。
- 7) 同書を参照。
- 8) H. A. Witkin, & D. R. Goodenough, *Cognitive Styles: Essence And Origins* (New York: International Universities Press, 1954) を参照。
- 9) S. E. Asch, & H. A. Witkin, "Studies in Space Orientation. I. Perception of the Upright with Displaced Visual Fields", *Journal of Experimental Psychology*, 38 (1948), pp. 325-337.
- 10) S. E. Asch, & H. A. Witkin, "Studies in Space Orientation. II. Perception of the Upright with Displaced Visual Fields and with Body Tilted", *Journal of Experimental Psychology*, 38 (1948), pp. 455-477.
- 11) H. A. Witkin, & S. E. Asch, "Studies in Space Orientation. III. Perception of the Upright in the Absence of a Visual Field", *Journal of Experimental Psychology*, 38 (1948), pp. 603-614.
- 12) H. A. Witkin, & S. E. Asch, "Studies in Space Orientation. IV. Further Experiments on Perception of the Upright with Displaced Visual Field", *Journal of Experimental Psychology*, 38 (1948), pp. 603-614.
- 13) H. A. Witkin, R. B. Dyk, H. F. Fatererson, D. R. Goodenough, & S. A. Karp, *Psychological Differentiation* (New York: Wiley, 1962) を参照。
- 14) 越智, 前掲書, p. 207.
- 15) 加藤義明「FD測定テストの試作と校正テスト」【人文学報】133 (東京都立大学人文学部, 1979), pp. 75-89.
- 16) 神永典郎・吉田昭久「知覚判断における集団圧力と Personality (その1)」【日本社会心理学会第24回

- 研究発表論文集』（1983），pp. 60-61.
- 17) 神永典郎・吉田昭久・小熊 均「Field Dependence と対人行動イメージとの関連（その1）——対人行動イメージに表出される攻撃性の検討」『日本社会心理学会第25回研究発表論文集』（1984），p. 26-27.
 - 18) 神永典郎「社会的圧力への“気づき”と認知機能との関連——知覚的場依存一場独立次元からの検討」（千葉大学大学院教育学研究科修士論文，1984，未発表）。
 - 19) 神永典郎ほか，前掲論文を参照。
 - 20) 神永典郎・吉田昭久・小熊 均「日常生活意識に表出する人間の攻撃性（Ⅲ）——対人行動イメージによる検討」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』39（1990），pp. 75-93.
 - 21) 神永典郎・安香宏「現代青年の生活意識における自己疎外の構造（Ⅰ）——『自己を疎外する行為』に関する質問紙の検討」『千葉大学教育学部研究紀要』34（1985），pp. 1-17.
 - 22) 神永典郎・安香宏「現代青年の生活意識における自己疎外の構造（Ⅱ）——『自己を疎外する行為』に影響を及ぼす社会的要因からの検討」『千葉大学教育学部研究紀要』39（1990），（印刷中）。
 - 23) 加藤厚「大学生における同一性の諸相とその構造」『教育心理学研究』31（1983），pp. 292-302.
 - 24) 加藤，（1979）を参照。
 - 25) N. Kato, "A Fundamental Study for Rod Frame Test", Japanese Psychological Research, 7（1965），pp. 61-68.
 - 26) N. Kato, "The Validity and Reliability of New Rod Frame Test", Japanese Psychological Research, 7（1965），pp. 120-125.
 - 27) N. Kato, "A Fundamental study"を参照。
 - 28) H. A. Witkin, et al., "Personality"を参照。
 - 29) N. Kato, "The Validity"を参照。
 - 30) 同書を参照。
 - 31) 宮本正一，吉田昭久「知覚判断における集団圧力と Personality（その1）」『年俸社会心理学』13（1972），pp. 149-160.
 - 32) 坂永篤子「認知過程に及ぼす集団の影響」（茨城大学教育学部卒業研究論文，1985，未発表）。
 - 33) N. Kato, "The Validity"を参照。
 - 34) 宮本・吉田，前掲論文を参照。
 - 35) 瀧上凱令・嶋田博行「日本人の図形認知技能(2)——場依存性概念の検討」『神戸大学教養部論集』27（1981），pp. 39-62.
 - 36) 鋤柄増根「視覚情報処理過程から見た認知スタイル」『名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）』25（1978），pp. 281-282.
 - 37) B. J. Fine, & A. V. Danforth, "Field-Dependence, Extraversion and Perception of Vertical: Empirical and Theoretical Perspectives of The Rod-Frame Test", Perceptual & Motor Skills, 24（1957），p. 526.
 - 38) S. E. Asch, & H. A. Witkin, "Studies（Ⅰ）"を参照。
 - 39) S. E. Asch, & H. A. Witkin, "Studies（Ⅱ）"を参照。
 - 40) H. A. Witkin, & S. E. Asch, "Studies（Ⅲ）"を参照。
 - 41) H. A. Witkin, & S. E. Asch, "Studies（Ⅳ）"を参照。
 - 42) 瀧上・嶋田，前掲論文を参照。
 - 43) 鋤柄，前掲論文を参照。
 - 44) 加藤義明「知覚における Personal な要因について——その1」『日本心理学会第28回発表論文集』（1964），p. 89.
 - 45) 江川文成「Field Dependence と創造性との関係について」『日本教育心理学会第13回総会発表論文集』（1971），pp. 40-41.

- 46) 江川文成「Field Dependence と Rigidity との関係について」『日本心理学会第35回発表論文集』(1971), pp. 601-602.
- 47) 加藤厚・加藤隆勝「場依存-場独立認知型の意義と妥当性について」『筑波大学心理学研究』5 (1983), pp. 87-93.
- 48) H. A. Witkin, et al., "Personality" を参照。
- 49) G. M. Vaught, "Accounting for Sex Difference on The Rod and Frame Test", *Perceptual & Motor Skills*, 33 (1971), p. 1114.
- 50) H. A. Witkin, et al., "Personality" を参照。
- 51) N. Kato, "A Fundamental study" を参照。
- 52) 瀧上凱令「場依存性の性差」『心理学評論』18 (1975), pp. 14-23.
- 53) 同論文を参照。
- 54) 神永・吉田, 前掲論文を参照。

Appendix I - i 検査 I, II の調査票（調査のお願いとやりかた）

*
No. _____

図形認知とパーソナリティとの関連性に関する調査

調査協力へのお願い

この調査票は、皆さんが、複雑な図形の中から単純な図形をいかにして見つけ出していかを研究するためのものです。内容は、〔I〕図形認知の方略に関する調査票、〔II〕対人行動イメージ調査票の2つから構成されています。

現在、私どもの研究室では、「図形認知とパーソナリティとの関連性」についての研究を進めております。今回、皆様にご回答いただくのは、この研究の重要な資料となるものです。つきましては、皆様のご協力をお願いいたします。

なお、調査の結果は研究以外の目的には使用いたしませんので、自分の思った通りにご回答下さい。

茨城大学教育学部教育臨床心理研究室

次の事項にご記入下さい。 性別 男・女（○印） 年齢 満 _____ 歳

なお、この調査結果をもとに、一部の方に、後日次の調査をお願いすることがありますので、下の事項にもご記入下さい。（皆様のご回答は、統計的に処理し、個人の結果が外部にもれるようなことはありませんので、ご協力をお願いいたします。）

名前 _____ 学年 _____ 学科 _____ 学生番号 _____

連絡先（住所） _____ (TEL) () - _____

〔I〕図形認知の方略に関する調査票（略称：GEFT）

< やりかた >

次の2～5ページには、下の□の練習例にあるような図形が並んでいます。左の□の枠の中にある図形と同じものが、右の4つの図形の中にそれぞれ入っているかどうか、ひとつひとつ次の要領でチェックして行って下さい。

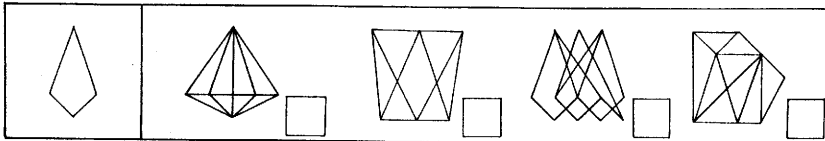
・入っている場合……右下の□の中に○印 ・入っていない場合……右下の□の中に×印

なお、入っている図形は、すべて同じ形・同じ大きさ・同じ方向です。できるだけやく、かつ、正確にやって下さい。

回答は、実施者の「始め」の合図で作業を開始し、「やめ」の合図で作業を終了して下さい。

この調査は、あなたの能力を見るものではありませんから、全部できなくても気にさせないで下さい。

< 練習例 >



Appendix I - ii 検査Ⅲの調査票（調査のお願いとやりかた）

※
No

大学生の図形認知と日常意識に関する調査

調査のお願い

この調査票は、複雑な図形の中から単純な図形を見つけ出していく方法と、日常生活での認識との関連性を研究するためのものです。内容は、〔Ⅰ〕図形認知の方略に関する調査票、〔Ⅱ〕大学生の日常意識に関する調査票の2つです。

現在私は、現代青年の意識形成過程における諸要因に関して、「図形認知と社会認識との関連性」についての一連の研究を進めております。今回、皆様に御回答いただくのは、この研究の重要な資料となるものです。つきましては研究の趣旨を御理解いただき、是非御協力下さいませうお願いいたします。

なお、皆様の御回答は、統計的に処理し、研究以外の目的には使用いたしませんので、自分の思った通りに御回答下さい。

千葉大学大学院教育学研究科学校教育専攻
教育心理学分野 神永典郎

※ 次の事項に御記入下さい。

性別 男・女（○印） 年齢 満 歳 学年 学部 学科

〔Ⅰ〕図形認知の方略に関する調査票（略称：GEFT）

< やりかた >

次の2～5ページには、下の の練習例にあるような図形が並んでいます。左の の枠の中にある図形と同じものが、右の4つの図形の中にそれぞれ入っているかどうか、ひとつひとつ次の要領でチェックして行って下さい。

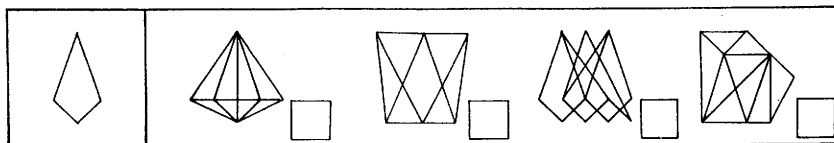
・入っている場合……右下の の中に○印 ・入っていない場合……右下の の中に×印

なお、入っている図形は、すべて同じ形・同じ大きさ・同じ方向です。できるだけやく、かつ、正確にやって下さい。時間は10分です。

回答は、実施者の「始め」の合図で作業を開始し、「やめ」の合図で作業を終了して下さい。

この調査は、あなたの能力を見るものではありませんから、全部できなくても気になさらないで下さい。

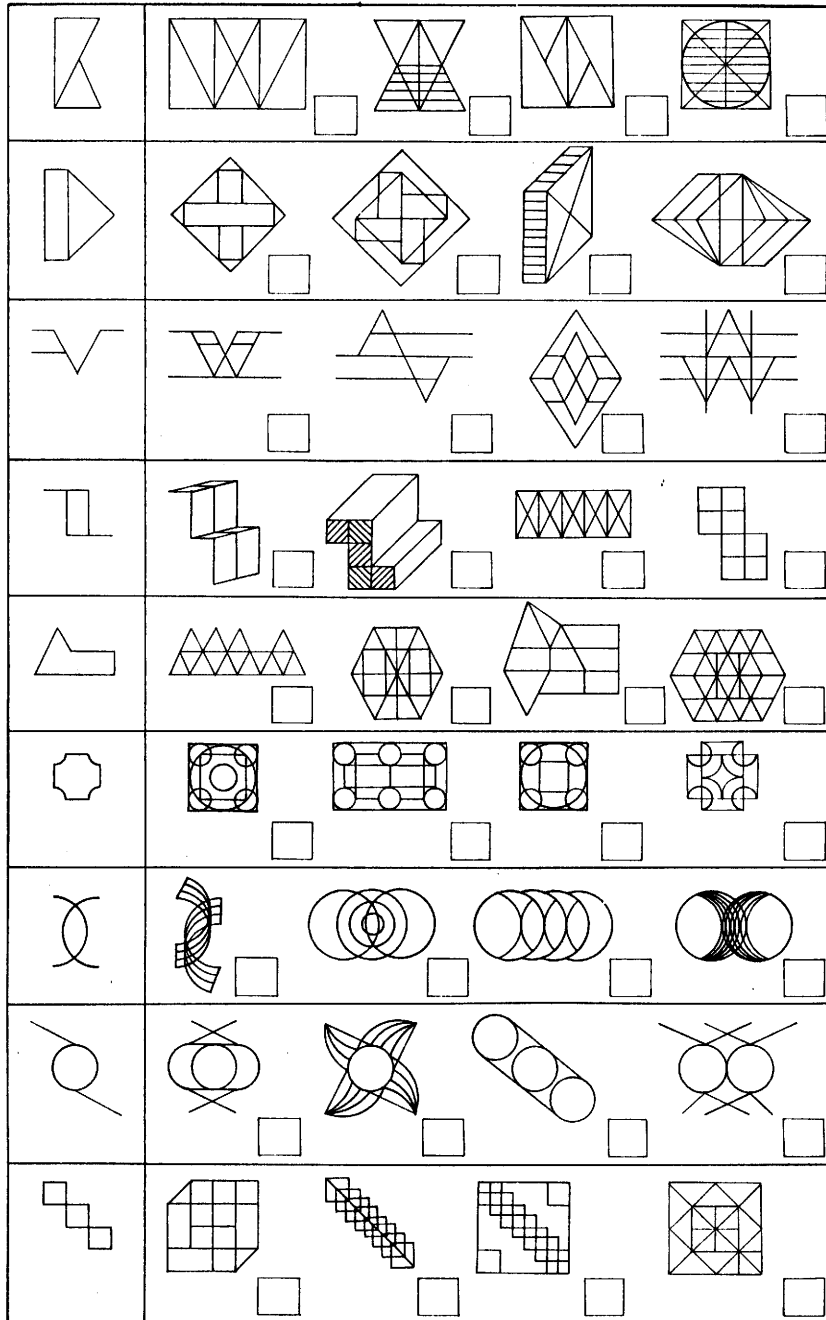
< 練習例 >



※ 合図があるまで、開かずにお待ち下さい。

Appendix II - i 集団式EFT検査用紙（その1）

G E F T . 1

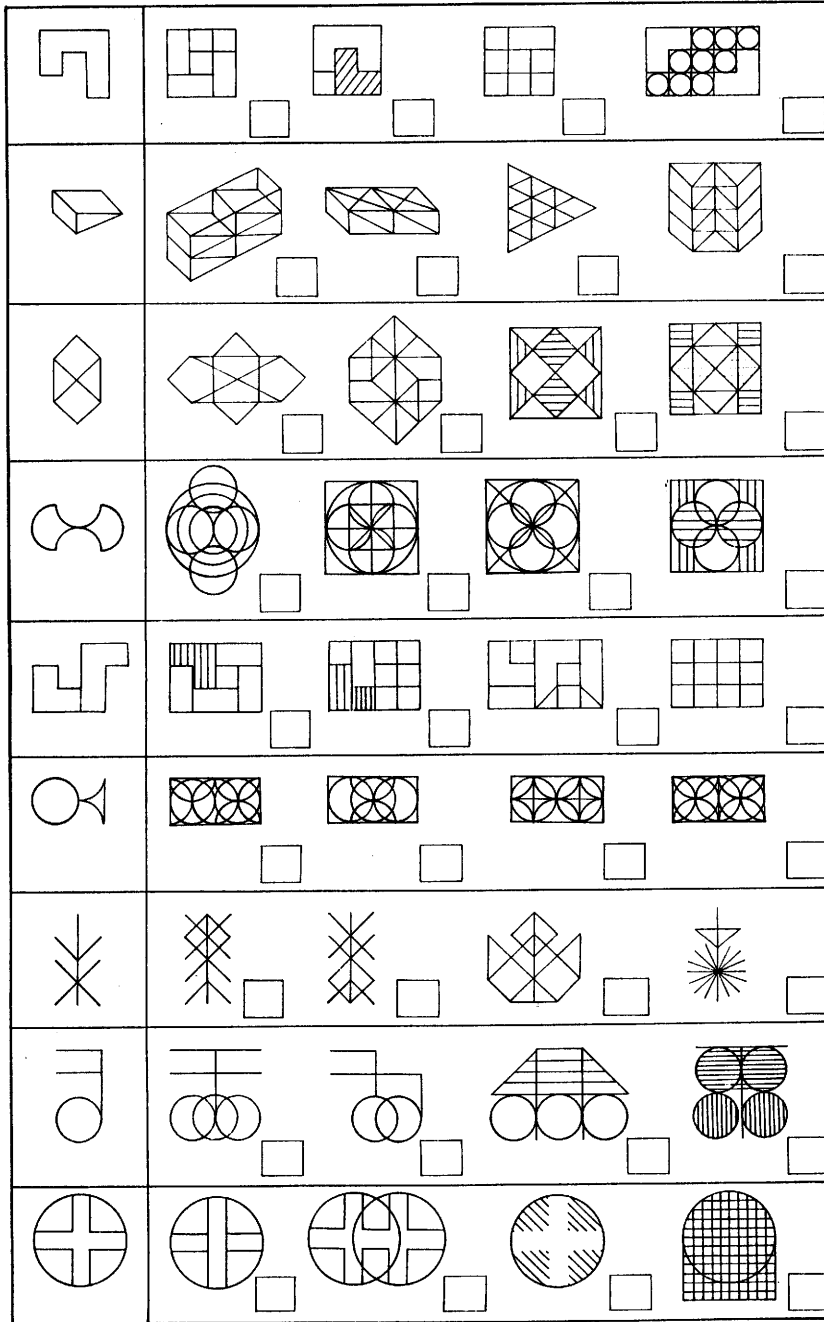


次のページにつづく



Appendix II - ii 集団式 EFT 検査用紙 (その2)

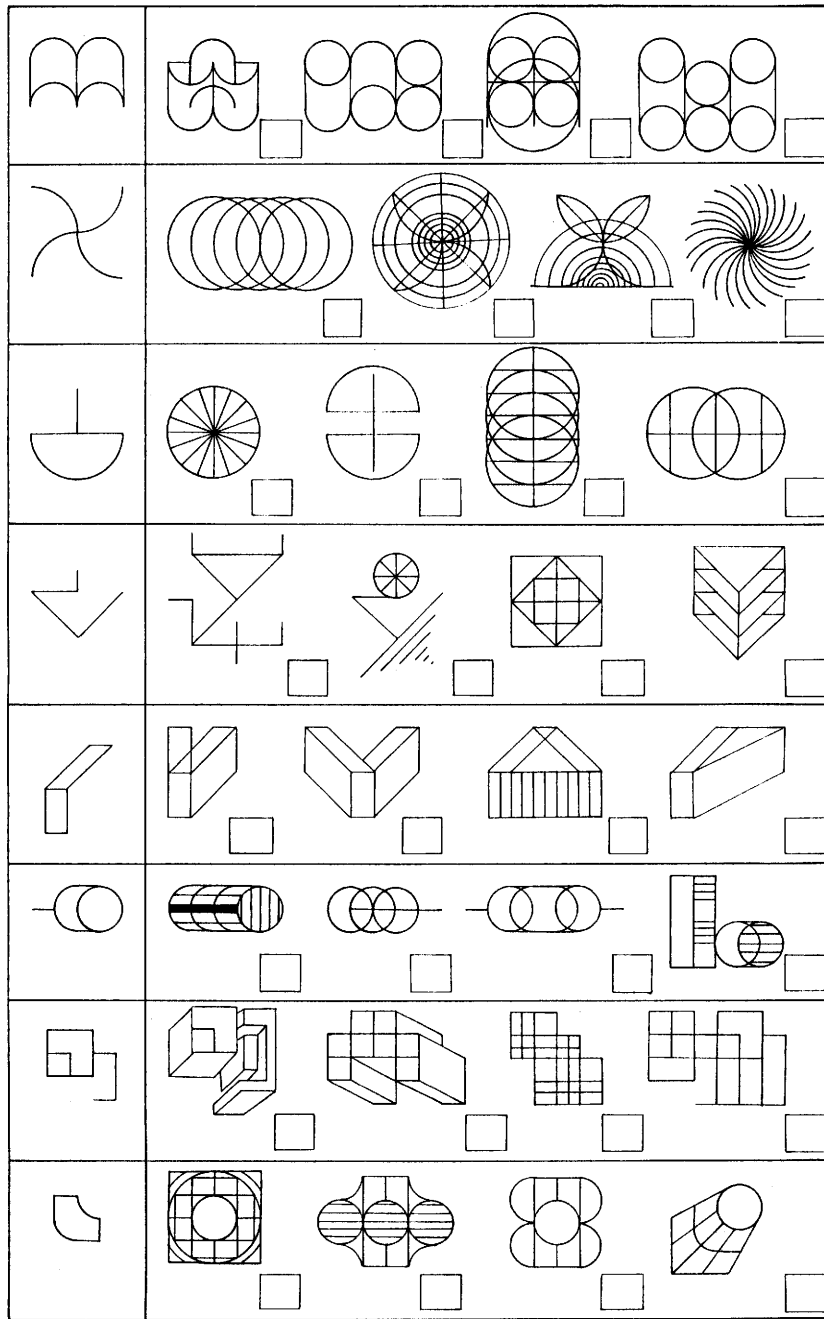
GEFT. 2



次のページにつづく

Appendix II - iii 集団式EFT検査用紙（その3）















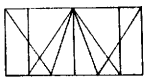


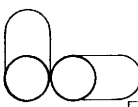
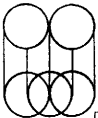
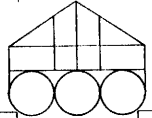

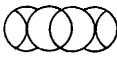
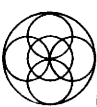
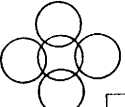




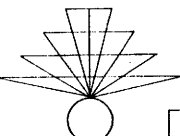


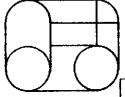
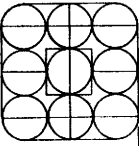
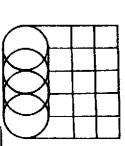
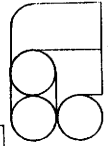


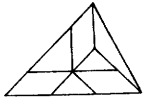


G E F T . 3



次のページにつづく

Appendix II - iv 集団式 E F T 検査用紙 (その 4)

G E F T . 4

					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
					<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

4
*